

## 追悼—柳原義達さん

柳原義達記念館が開設されて1年が過ぎましたが、11月11日に柳原義達さんが94歳でこの世を去られました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。柳原さんは記念館が完成してから来館されていません。記念館を柳原さんにご覧いただく日が来ることを関係者一同願っていましたので、ご逝去は非常に残念なことです。

当館と柳原さんとの関わりは、1982年に代表作3点が収蔵されたことに遡りますが、1996年の「柳原義達展」、1999年の「柳原義達アッサン展」開催を通じて強い関係が結ばれました。私が柳原さんとお会いする機会を持つようになったのは、「柳原義達展」準備が始まった1994年頃のことでした。

柳原さんの彫刻は、空間の中に立つことの美しさ、生命感を追究してやまない厳しい姿勢から生まれています。柳原さんの美術論集は「孤独なる彫刻」(1985年刊)と題されていますが、柳原さんはただ一人創作を続ける孤独な彫刻家でもありました。

10年以上前のこと、ある彫刻展の受賞作品選考会で柳原さんと同席する機会がありました。そこで柳原さんは、「彫刻作品はモニュメンタリティが非常に重要である。しかし、最近の彫刻家にはこのモニュメンタリティについて考え違いをしている人がいる。彫刻のモニュメンタリティについて皆で考えるべきである」といった内容の発言をされました。

当館にある代表作《赤毛の女》《黒人の女》《バルザックのモデルたりし男》を改めて見ますと、彫刻作品の存在感、あるいはモニュメンタリティは単に大きさや見栄えの問題ではないと柳原さんが考えていたことがよくわかります。

告別式の弔辞で彫刻家の掛井五郎さんが、これら3点から彫刻家たちが大きな衝撃を受けたことを語っておられました。掛井さんの弔辞を聞いて、柳原



さんがバリでつかんだ彫刻表現が日本の具象彫刻界に与えた影響の大きさを改めて認識した次第です。

彫刻家としては自己を厳しく律する姿勢を貫いた柳原さんは、同時に人間味豊かであると同時に、ユーモアにあふれた方でした。思わず笑いを誘う逸話がたくさん残されています。

柳原さんは1994年以降彫刻制作からは遠ざかり、素描のみを続けておられました。お会いするたびに、「新しい素描があるから、ぜひ見てほしい」と言われ、拝見していると「どうですか。おかしいところはないですか」と若輩の私にも真剣な眼差しで質問されました。その謙虚な姿勢には本当に驚かされ、多くのことを教えられました。

学生時代から長期にわたって交友を結ばれた彫刻家の佐藤忠良さんは、追悼談話で「日本の具象彫刻では、あんな作家はもう、ちょっと出てこないでしょう。ちゃんとした中身と表現力がある人は」と語られています。この言葉に彫刻界における柳原さんの存在感の大きさが尽くされているのではないかと思います。(MI)